

石田憲 著

『ファシストの戦争
—世界史的文脈で読むエチオピア戦争—
千倉書房 2011年、270ページ、3200円＋税



石川博樹

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

石田憲氏は日本における戦間期イタリア政治外交史研究、ファシズム研究の第一人者である。本書は3章から構成されており、各章は1994年から2010年にかけて著者が執筆した第二次イタリア・エチオピア戦争に関する3本の論考が基になっている。

19世紀末にエチオピアとその植民地化を図るイタリアとの間に生じたアドワの戦いをはじめとする一連の戦いが生じた。これらを総称して第一次イタリア・エチオピア戦争と呼ぶ。それに対して、1935年に始まり、1936年に終結したイタリア軍のエチオピア侵攻を第二次イタリア・エチオピア戦争と呼ぶ。後者は最後の植民地獲得戦争、あるいは国際連盟が世界初の経済制裁を実施した戦争として知られている。そしてこの戦争はイタリアのファシストたちが主体的に戦いを主導し、勝利の実感を抱くことができた唯一の戦争であった。それとともにこの戦争はイタリアのファシストと反ファシスト双方にとって思想・運動・体制上の分水嶺となる重大な変化をもたらした。またこの戦争は国際的に大きな反響を呼び、世界史の転換点にもなっている。本書において著者は、第二次イタリア・エチオピア戦争をイタリアとエチオピアという二国間の問題に還元することなく、世界史的視座から分析し、「ファシストの戦争」として位置づけることを試みている。

権力奪取後、ムッソリーニはファシストたちの多様な志向性と行動を調整・利用・操作しながら自らの主導権を發揮していた。第1章「サブリーダーたちの戦争」において著者は、第二次イタリア・エチオピア戦争に従軍したサブリーダーを3つの類型に分け、それぞれの政治的行動、そして彼らに対してムッソリーニが行った調整について検討する。本章において、著者は第二次イタリア・エチオピア戦争を契機にファシズ

ム体制が本来の思想や政治的方向性よりも表層的な自己賛美を優先するよう変質したこと、この戦争を通してムッソリーニが達成した独裁強化が、長期的には彼自身の転落とファシズム体制の崩壊を招いたことを指摘する。

第2章「幻の国際義勇軍」は、スペイン内戦のものに比べるとはるかに小さいものの、国際的な広がりを見せたエチオピアに対する国際義勇兵運動について分析を加える。本章において著者は、ファシストの戦争に対抗した国際義勇軍形成という視座からエチオピア戦争が与えた世界的な影響を俯瞰する。そうすることによって第二次イタリア・エチオピア戦争に対する国際的な抵抗運動の多様性を明らかにするとともに、ナチスドイツとの比較、あるいは第二次世界大戦における弱体ぶりがゆえに強調されてこなかったファシスト・イタリアの侵略性、人種主義的傾向という特徴を指摘する。さらに後発帝国主義国による最後の植民地獲得戦争という枠組みにとどまらない、抑圧された人々が解放へ向けて動き出した転機として、エチオピア戦争を措定することができるかと主張する。

相前後して開始された第二次イタリア・エチオピア戦争と日中戦争は、イタリアと日本が第二次世界大戦への道を決定的に歩み出す契機となった。第3章「文学から見た戦争：エチオピア戦争と日中戦争をめぐって」は、両国の文学者たちがこれらの戦争をどのように認識し、それらの認識がどのような意味を持っていたのかについて考察する。本章において著者は、両国の文学において、戦争を肯定する排外的ナショナリズムという共通性が見出せること、それとともに思想の連続性、および体制への批判・抵抗の有無において両者に相違があったことを明らかにする。さらに著者は、

第二次イタリア・エチオピア戦争が「ファシストの戦争」であったがゆえに、ファシスト体制への抵抗の新しい思想的基盤を提供する端緒ともなっていると主張する。

このように本書はイタリア国内から国際社会へとフォーカスを移しつつ、歴史から比較へと対象の分析方法を変えていく。そうすることによって著者は世界史的視座から第二次イタリア・エチオピア戦争を多角的に分析し、この戦争の「ファシストの戦争」としての性格を浮かび上がらせることに成功した。従来語られてきた単純な独裁論や体制構造論とは一線を画す本書は、ファシズム研究、第二次イタリア・エチオピア戦争研究に重要な貢献をしたと言えよう。

本書においてエチオピアは舞台としては取り上げら

れるものの、エチオピア人が不在のまま議論が進められている。著者自身その問題を認識しており、「最大の被害者であるエチオピア人は中心におかれぬまま、各章の主要登場人物たちが自分たちの物語を一方的に形づくっていた」と述べている (p. 201)。

往々にして第二次イタリア・エチオピア戦争がエチオピア人不在のまま語られるという現実を、我々は直視し、その意味を深く考察すべきであろう。そしてそれをふまえたうえで、エチオピア人が果たした役割に十分光をあてつつ、この戦争を世界史的視座から論じることがエチオピア史研究者には求められているのではなかろうか。

(いしかわ ひろき)

会員の異動

■ 入会者

氏名	入会年	所属
青島 啓太	2014年	芝浦工業大学工学部建築工学科
竹中 浩一	2014年	独立行政法人国際農林水産業研究センター
野口 真理子	2014年	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
慶田 勝彦	2014年	熊本大学文学部
Robel Haile Gebru	2014年	大阪大学
江端 希之	2014年	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
Aklilu Habtu	2014年	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
飛内 悠子	2014年	日本学術振興会 / 大阪大学
坂本 拓人	2014年	日本学術振興会特別研究員 PD/ アジア経済研究所
吉野 宏志	2014年	筑波大学大学院人文社会科学研究科
浅田 静香	2015年	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
中澤 芽衣	2015年	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

■ 退会者

氏名	退会年
関根 悠里	2014年
藤山 辰次	2014年
松村 圭一郎	2014年
野木 將典	2014年